

< 特集まえがき >

戦争・紛争による民衆の悲劇

中須賀 徳行 (NAKASUKA Noriyuki)

古来から、国家間の戦争や部族間の紛争が、多くの人びとを死や飢餓といった悲惨な状態に追い込んできたが、とりわけ科学・技術の発展した近代以降において、その規模は拡大の一途を辿っている。例えば第一次世界大戦では、軍人戦死者、一般市民の犠牲者数とともに900万人程度と推定されているが、第二次世界大戦では、軍人戦死者が1500万人、一般市民の犠牲者数は3800万人と推定されている(木畑洋一「第二次世界大戦の構造と性格」『戦争と民衆 第二次世界大戦』(歴史学研究会編、東京大学出版会、1996)。このように、犠牲者の数が増えるだけでなく、非戦闘員犠牲者数の多いのが現代戦の特徴である。

戦闘方法も、かつては刀剣や銃や大砲といった比較的単純な武器によるものであったが、今ではA(原子爆弾)、B(生物兵器)やC(化学兵器)といった、まさに科学・技術の粋を集めた兵器が使用されているに止まらず、無差別的な戦略爆撃あるいは遠隔地からの無線操作による爆撃へと進んでいる。

しかしその一方で、植民地支配の悪弊が残るアフリカや南アジアでは、民族的あるいは部族的な対立から無辜の民が暴力や飢餓に苦しんでいる。また、宗教的な対立もそれに拍車をかける要因となっているし、自由とか民主主義というスローガンが、「戦争」を正当化している場合もある。

本誌は毎年8月号で「平和特集」を組んできたが、今回はやや趣を変えて、こうした民衆の犠牲についてさまざまな角度から、それぞれの分野で長らく研究あるいは活動してこ

られた方がたに執筆をお願いした。

フォトジャーナリストとして長らく戦場の貴重な写真を撮り続けてきた中村悟郎氏は、ベトナム戦争で使われた猛毒のダイオキシンを含む枯葉剤による悲惨な結果について、写真を多用して詳細に述べている。

細菌戦については中国・ハルビンの731部隊が有名であるが、たびたび中国を訪問して調査をしてきた松井英介氏は、他の地域でも多数の犠牲者がいることを活写している。

近代戦の特徴である空爆は、必然的に無差別爆撃によって多数の市民を犠牲者にし、大量殺戮へと向かうことになった。そのきっかけとなった重慶爆撃や現代戦の様相を、前田哲男氏が詳述している。

原爆投下はまさしく大量破壊兵器による空爆の典型であるが、即死した市民に加えて、原爆投下後に入市した人びとも、ある期間後、がんなどに苦しめられることとなった。日本政府はこうした人びとを被爆者として認めていないが、原爆症認定集団訴訟の証人として原告側27連勝に貢献してきた矢ヶ崎克馬氏は、それは内部被曝によることを解説している。このことは今回の福島第一原発の事故による放射線被曝の評価にあたって、きわめて重要な問題である。

争いは必ずしも国家間だけではなく、同じ国の中で、さまざまな理由から内戦が頻発している。それによる民衆の犠牲も悲惨な様相を示しているが、このような紛争の実相について、児玉谷史朗氏が解説している。

(なかすか・のりゆき：岐阜支部，化学)